

「帯江研」だより

帯江鉦山研究会事務局
岡山市東区益野町295-15 坂本昇方
E-メール
obieken913@yahoo.co.jp

帯江鉦山廃墟跡とその麓の豊洲にて過ごした思い出

高橋義雄

1 再び賑やかになった帯江鉦山廃墟跡付近

私事に関わることをお許し下さい。私は警察官の家庭に育ち、幼少より岡山県内各地に転居していた。壱カ所の住まいは長くて3年であり、真の友人は少ないが、各地に友人がいることは心強い。その中で、本当に稀有だが、中庄の帯江鉦山跡がある麓の倉敷市豊洲村に、私は昭和25年から同33年迄(小学3年から帯江中学3年)過ごした。同地は私にとって、多感な時期を過ごした最も懐かしい土地である。

私は元旦には地元西阿知の熊野神社に参詣し、足を伸ばして中带江在の安産の神様(不洗帯江観音寺)に参る。私が遊んでいた70年前の境内は小さく、ひっそりしていたが、現在は寺の規模が大きくなっており、驚くほど参詣客や修行僧が多い。昔日の感がある。また、帯江ゴルフ場も賑わっている。

2 帯江・豊洲・中庄地域の農家は貯蓄性向が高い

豊洲村、その隣の帯江村は気候温暖で災害が少なく、肥沃な土地に恵まれていて、米・藺草・野菜・果実の生産が盛んである。「帯高・早高・高須賀」で生産される藺草は「三高藺」として有名で、良品質で高価格であった。藺草は極寒に植え付け、灼熱時に刈り取る。労働は短期集中を要するため、県外からも日傭(季節労働者)が来て、農家に宿泊し、朝4時から晩の6時まで働く。厳しい労働なので、4度の飯を食べる。刈り取って色染めした藺草は、降雨に出会うと素早く取り込まなければならない。通り合わせた銀行員も、取り込みを手伝ったものである。

豊表は倉敷市西阿知が有名で、高梁川土手には色鮮やかな花筵や豊表が干される。同地では正月三が日以外は、毎日豊表自動織機を動かす音がする。自動織機は、順調に動いていれば手持ち無沙汰なので、亭主は将棋を指す。従って将棋に強くなり、故大山康晴名人が誕生するのである。藺草製品は価格変動商品のため、農家は相場に鋭敏で、その感覚は株式売買にも活かしている。これらの地域では、郵便貯金が多い家も珍しくない。

3 帯江村出身の尾崎生三氏と倉敷商業銀行設立



大原孫三郎
(中国銀行提供)

帯江村の地主・尾崎生三氏は、学校用地を寄贈した篤志家である。尾崎氏はさらに衆望に答えて、明治32年に倉敷銀行とは行風の異なる倉敷商業銀行を設立した。倉敷銀行の株主は倉敷紡績の富裕な株主が主体であるが、倉敷商業銀行は商業、農業、藺草・豊表生産者等が主である。倉敷商業銀行は積極的に貸出需要に応じて業容を拡大し、倉敷銀行に匹敵する銀行に発展した。しかし、度重なる経済不況に遭遇して、尾崎生三は大原孫三郎と小銀行合同を進め、大正8年に倉敷銀行は倉敷商業銀行を含む6行の画期的な同時合併を行った。大蔵省は全国最初を意味する「第一合同銀行」と名づけるよう勸奨した。さらに、大原孫三郎は昭和5年金融恐慌のどん底の折に「一県一行」となる中国銀行を設立した。同年には、大原孫三郎は大原美術館も設立した。従って昨年は中国銀行と大原美術館はともに設立90周年であった。この結果、岡山県内では大規模銀行が早期に誕生したため、金融混乱が回避されたのである。(帯江鉦山研究会員)



中国銀行の草創期、慰労会に参加した中銀関係者
大原美術館前庭で(中国銀行提供)

銅山や産業遺産に高い関心を持つ研究者、歴史愛好家らが集まって帯江鉦山研究会が出来ました。二〇二〇年秋に岡山市内で産声を挙げた会で、略称は「帯江研」と言います。興味のある方、集まれえ！「帯江研」。いま会では、皆さんの参加を大いに歓迎していますよ。

集まれえ！「帯江研」

次項へ →

有志会員

- ・在間 宣久(元岡山県立記録資料館長)
- ・坂本 昇(元山陽新聞編集局次長)
- ・難波 俊成(岡山民俗学会理事長)
- ・上田 賢一(元岡山大学非常勤講師)
- ・柴田 正子(裏千家茶道教授)
- ・前田 昌義(中庄の歴史を語り継ぐ会員)
- ・小西 伸彦(産業遺産学会理事長)
- ・高橋 義雄(岡山歴史楽修塾代表)
- ・村上 節子(文化史研究者)
- ・小柳 智裕(就実大学専任講師)
- ・戸板啓四郎(中庄の歴史を語り継ぐ会代表)
- ・森元 辰昭(岡山近代史研究会長)
- ・近藤 修六(医療法人六峯会理事長)
- ・永瀬 彰博(中带江老人会長)

坂本金弥を語る ■ 4 ■

一「中民」創設

右顧左眄の出来ない人。坂本金弥59歳の生き様を追想すると、これほどの人物評はない、とつくづく思う。とりわけ、それは政治局面において顕著な気がするが、まさに1892(明治25)年7月の「中国民報」創立経緯も、そうした典型の一例ではないか。

本論に入る前、少し当時の岡山新聞界の事情を垣間見ておくと、郷土岡山には明治12年創業の「山陽新報」が老舗紙として存在。「岡山日報」(自由党系)という新聞と互いにしのぎを削っていた。そうした情勢下、「中民」が両紙に割って入る格好で誕生したのだ。

折から帝国議会開設間もない世の中。世論は喧々囂々とし、新聞社も大雑把に政府側と反政府側に割れていた。いかに論戦が活発であったとしても、新参組の参入は容易でないと推察されるのだが…。

しかし、金弥は三紙が「鼎立」する岡山新聞界へ敢えて足を踏み入れた。「中民」創業の20年代半ばは、帯江鉦山が規模拡大や近代化に向け、涙ぐましい努力の最中で、事業資金にも事欠く有様。そうした延長線上にあって、なおかつ金弥は新聞人として触手を伸ばした。それも彼の支援者から度々借金を重ねながらの話だ。

他産業へ参入する余裕があらうとは、筆者にはとても思えない。実際「中民」創刊当時の編集人の一人、西村丹治郎は「新聞を編集する人は皆無給を原則とした」(法要回顧談)と振り返っている。

社員へ満足に給料が払えない自転車操業。それなのに新聞事業を興すとは如何なものか。一体どんな目論見があったというのか。

よくよく考えれば、やはり当時の政治状況しか思い付かない。その時分、金弥が主宰する月刊評論誌『進歩』は、当局の検閲で発行禁止処分中だった。その上、時の内務大臣・品川弥二郎による第2回衆院選で“空前絶後”の選挙大干渉。岡山も例外ではなく、対立候補の犬養毅へ向けた選挙妨害は激しかった。

騒然とする世情。見兼ねた『進歩』同人らは、異常な社会状況に危機感を覚えたのは無理もない。やがて帯江の現場事務所に押しかけ、金弥に直談判だ。対する金弥の返答である。

「極力新聞の方をやれ、いかんところは私が引受ける、機関新聞発行の使命に向つて邁進せよ」(前掲談)
直面する政治課題に対し、本人自らの信念と人柄をうかがう逸話である。(坂本 昇)



中国民報の創刊を伝える山陽新報=M25・8・2

帯江鉦山閉山後の情景

昭和三十五年頃までは、採掘跡の堅穴、横穴が至る所にありました。幼い頃は、鉦山跡地は絶好の遊び場でした。度胸試しと言われて上級生から横穴の奥深くまで連れていかれ無事に脱出できた事は今でも鮮明に覚えています。

身寄りのない人は、三番ホールグリーン付近の地下に埋没されたと言われていました。一九八九(平成元年)年に岡山ゴルフ倶楽部、当時の理事長が三番

帯江鉦山が閉山した年である昭和二十四年、帯江鉦山南斜面の不洗観音寺がある集落に私は生まれました。

当初九ホールから始まり一九七三(昭和四十八)年に十八ホールに拡張されました。帯江鉦山が稼働中に、多くの従業員が病気や事故で亡くなったと聞いています。



ゴルフ場の従業員が自宅の庭や野に咲いた草花をお供えして供養をしていました。(帯江研会員)

閉山後ハゲ山だった山々は、地元住民の協力とゴルフ関係者の熱意により美しい風景に変貌しました。ゴルフ場のクラブハウス周辺から眼下を見下ろした時、帯江鉦山が稼働していた時代の情景が頭に浮かびます。

帯江鉦山は、一八八七(明治二十)年に採掘が始まり一九四九(昭和二十四)年に閉山となりました。

帯江鉦山跡地に一九五二(昭和二十六年)の半ば頃よりほとんどが、手作業でゴルフ場の造成が行われました。

一九五三(昭和二十八)年に県下で二番目の岡山ゴルフ場(帯江コース)が開業しました。

(帯江研会員)

中間報告

「中民」3代・坂本権三郎をめぐって

報告者=坂本 昇

◇はじめに

坂本金弥(以下「金弥」)の妹婿で坂本権三郎(以下「権三郎」)という人物がいる。中国民報(以下「中民」)の3代目社長を務めた人だが、金弥の令弟で「中民」2代目社長だった義夫ほどには、その事績が知られていない。

そこで今回、帯江研の調査行で権三郎の郷里・井原市など

を訪ねる機会を得たので、取り敢えず中間報告としてまとめておく。

権三郎については十分な諸資料が残されているわけではない。ここでは彼が各界でいかに金弥を補佐し、金弥の名を成さしめた身内の一人であったか、その点に視点をおき、調査行で分かった動静や人物像などを述べてみる。

◇プロフィールの空白

「中民」社誌や戸籍簿などによれば、権三郎は1869(明治2)年2月11日、小田郡大江村(現井原市大江町)で岩梶類蔵の次男に生まれた。従って、本名は岩梶権三郎といい、1892(明治25)年4月26日金弥の妹・濱と結婚し、坂本姓に改姓した。それ以後、坂本権三郎と名乗った。

義夫とは、ちょうど同い年になる＝写真1。権三郎は、長じて1881(明治14)年4月設立の「明治法律学校」(明治大学の前身)で学び、優秀な学生であつたらしい。だが、卒後の動向はよく分からなかったのだが、今調査で偶然ともいえる幸運が重なり、その後の権三郎の足取りについて、ごく一部分だが明らかとなった。



(写真1) 坂本権三郎

井原市立図書館蔵書の郷土資料『大江史談』に岩梶権三郎という名前が見つかり、併せて大江小学校助教とだけ綴られていた。

これが糸口となって早速地元へ向かい、大江公民館と大江小学校を訪ねた。偶然にも立ち寄った先の公民館前館長・岩梶幸子さんは権三郎の子孫であることが分かり、同公民館の仲立ちで面談。自宅を訪れると「中民」社誌に掲載されている権三郎とそっくりな写真もあった。

また、大江村当時の小学校は、現在の井原市立大江小学校として引き継がれており、同校には『学校沿革史 第一巻』が所蔵。それによると、岩梶権三郎は1884(明治17)年6月、臨時雇として同校に着任し、月俸は2円とあつた＝写真2。翌年には助教に任用(月俸3円50銭)されたものの1887(明治20)年1月、辞職していることが判明した。

権三郎在職当時の小学校は、明治15年4月の学制変更に伴い初等、中等2科が設けられ、初等科は修身、読書、作文、習字、算術、体操、中等科はさらに地理、歴史、博物、物理、図画の教科が加えられて11科目に。同時に校名も村立が付け加えられるなど、学校教育組織が次第に整備されつつあつた時期。

◇クレーと権三郎

しかし、学校を辞めた20年1月以降、権三郎が入婚となつた25年4月までの、5年間については現時点で全く不明である。この時期の権三郎の足取りは杳として知れない。

一体、金弥と権三郎はいつ、どこで、どのような形で知り合ったのか。果たして、二人の間にどんな深い親交があり、権三郎は坂本家の人となつたのであろうか。

ともかくも権三郎が入婚後、坂本家の人物として世間に“顔”を出し、その動向をうかがうのには1896(明治29)年の「三石クレー株式会社」設立に伴う事例が適切ではないかと思われる。

兵庫県境と接する三石地区は古くから耐火レンガ、クレー産業の盛んな土地柄だ。それだけに『和気郡誌』(私立和気郡教育会編)や『吉永町史 通史編Ⅲ』(吉永町史刊行委員会編)に

目を配ると、三石クレー株式会社＝写真3＝の経緯が事細かに述べられていた。

つくづく私の資料調査不足を思い知らされた一件だが、本稿の演題でもあり今一度、両書からその概略を採録しておこう。

<岡山政財界の実力者の坂本金弥、英保村(現吉永町)の万波忠治・北川親太郎、ほかに花岡(写真3)明治後期の三石クレー



・三石城史』より

雅太郎・池畑喜幸太・小郷菊太郎・大饗兵吉・片岡寛三・矢代和平・柳沢安太郎の10人を発起人として、明治29年認可を得て、同年3月1日に賛成株募集を完了し、操業総会を開き、重役を定めたり。「三石クレー株式会社」として資本金3万円、社長に坂本権三郎、専務取締役役に万波忠治、取締役役に野吹秀太郎・大饗兵吉・池畑喜幸太が就任した。そして、同年7月5日から製造を開始した>

ここに権三郎が社長として名前が登場している。ところが、社長に就任した直後のこと。思わぬ自然災害に見舞われるのである。

<三石クレーは7月20日、8月20日と2回にわたり大洪水をうけた。それにより、工場事務所の一部と、製品・半製品・容器などのほとんどが流失した。同社は修理・回復に努力したが、生産低下により第1期利益の総額はわずか441円4銭7厘にすぎなかった。これにより明治30年には、坂本権三郎は社長を退き、万波忠治専務取締役が新社長に就任>

その後も権三郎は「山陽新報」に載つた同社決算報告＝写真4＝の広告を見れば、取締役として名前が引き続き載っており、同社と長く関わっていたようである。

(写真4) 明治38年7月に告知の三石クレー第18回決算報告

◇「中民」3代社長へ

また権三郎は、1901(明治34)年～1913(大正2)年2月まで「中民」第3代社長として社務を統括している。これは初代オーナー・金弥が1898(明治31)年3月の第5回衆議院選挙で岡山から立候補し、初陣を飾つたのに伴って社長を義夫と交代した。

さらに第7回総選挙(M35・8)の時、金弥は大分県から立候補することになったため、義夫が岡山・郡部から立ち、当選。その選挙に伴い、社長業交代で義夫から社長を引き継いでいる。ちなみに、金弥は第8回総選挙も大分から立候補したが、いずれも落選。岡山で復活当選を果たすのは第9回総選挙(M37・3)の時まで待たなければならなかった。

結果、義夫は代議士生活を2期で終わり、その後は主に「中民」編集業務に携わって活躍した。社長業はそのまま権三郎が務め、倉敷・大原家へ「中民」が身売りをする大正2年2月まで続けていた。

岩梶幸子さんの父・岩梶侃治氏が『坂本権三郎の事』(A4版、27ページ)という小さな冊子を編んでいる。思い出話として侃

明治十七年三月学務委員池田月八郎撰
寛一之代
六月臨時雇池田三郎著任(月俸貳圓)

(写真2) 権三郎着任の記録

治氏が語っているのによれば、権三郎と逢ったのは岡山師範学校受験のため父親に連れられ岡山へ行き、受験の間、宿として止宿したのが権三郎宅だったそう。1936(昭和11)年のこと。

「もうすっかり年寄りで悠々自適の身であった。“どっしり”とした体格で“ひげ”それも真白の品のよいひげをたくわえあまり口数は多くなくゆったりとした風ぼうであった」

寡黙な人物で囲碁を愛し、三段の腕前だったとか。1925(大正14)年10月分家の届け出をしており、岡山市新西大寺町74(現表町3丁目)の天瀬細堀に住んだ。侃治氏が厄介になった所である。

◆一族が結束、金弥を支援

以上、権三郎について彼の動静と人柄の、ほんの一端を垣間見た。権三郎本人は三石クレーのほかに、坂本家系譜の会社役員などに名前を連ね、事業活動や政治方面において、よく金弥の活動を補佐したのである。

地元“岡山の名代”といえは言い過ぎかもしれないが、義夫や鑿四郎をはじめとした親族とともに結束し、“縁の下の力持ち”として陰の功労者を務めている。そうした事例を思わせる記事や名刺広告が、地元紙「新報」には再々掲載されている。

例えば、1901(明治34)年津山市であった憲政党県本部関係者らの懇親会では金弥の代わりに代理出席をしたり、坂本家挙げての結束という面から指摘すると坂本合資会社=写真5=設立が、そのよきケースであろう。

同合資会社は、それまで金弥の個人経営だった諸事業をまとめ、1906(明治39)年4月1日に設立。本店を岡山市大字東中山下40番地に置き、支店は大阪市東区高麗橋4丁目60番地が当初の所在地だった。



(写真5) 坂本合資の名刺広告

無限責任を負う金弥が代表社員に名前を留め97万円を、他の兄弟・義夫、権三郎、鑿四郎3人が、それぞれ1万円ずつ出資した。そして、翌年7月には有限責任社員の権三郎が無責任社員として加えられている(登記簿謄本)。

少し余談になるが、金弥は100万円近い出資金をよく準備できたものだ。39年度の県一般会計歳出決算総額は、県の報告

を見ると89万5203円である。警察や学校教育など県事業費の支出金総額を上回る出資金である。当時の1円は今の価値に換算すれば、約2万円とされるから、100万円近い額を金弥個人で用意できるとは驚かされる。それだけ本業・帯江鉱山=写真6=から得る収益が莫大であったのであろう。



(写真6) 明治40年代初めの帯江鉱山・個人蔵

財を成した金弥は、この時期の38年に後楽園傍らの荒手屋敷(旧伊木屋敷)を購入し、市内上西川町から古京町8番地へ移っている。転居に際し造作した屋敷表門を見た同町出身の文学者・内田百閒^{ひやっけん}は随想中で、“いかにも成り金風情が”と風刺だ。実際、金弥は39年の県貴族院多額納税者議員互選人名簿で一位となり、納税額1万1287円37銭を納めた。他の多額納税者の顔触れは大地主層が多いのに対し、金弥の場合ほぼ全額が所得税による支払い。

現代風にいえば新興の鉱山成り金だったのは確かである。

◆まとめにかえて

以上のように中間報告であるため、内容の乏しい調査・調べの結果報告となっている。が、まとめにかえて今後の課題を列挙しておけば、第一に三石クレーでの金弥・権三郎の坂本家と地元有力者である発起人9人との関わり、とりわけ万波忠治については注目し、調べを進めたい。

その上で、権三郎に関する諸資料の、さらなる発掘は当然ながら明治21年に小学校助教を辞め、郷里を後にした以後、権三郎が金弥家に入るまで5年間の空白時期の動静については、これは何としても解明し把握に努めたいものである。

三点目は、権三郎をはじめ義夫や鑿四郎以外にも、坂本合資会社に名前を連ねる武藤興作、宍戸巻次といった面々、つまり金弥周囲を取り巻く親族や身内同然の仲間との交わり、さらには坂本一族結束の在り様にまで及んで考察できれば幸いである。

ニュース通信

◆帯江研HPが開設

かねて予告していた帯江鉱山研究会(帯江研)のホームページ(HP)が、できました。会員の小柳智裕氏が立ち上げ作業に当たり、「帯江研」だよりと同様にオレンジを基調としたシンプルな画面構成=写真。

トップページ下・写真欄のスライドショーには迫力のある写真がアップされ、見ごたえ十分。HP担当の小柳氏は内容もその都度、更新して新鮮な情報を盛り込み、多くの方に見てもらえるようにしたい、と話している。

ホームページ・アドレス(URL) <http://tomo.milkcafe.to/obieken/>

◆「帯江研」だより臨時号発行

コロナ禍の収束を見据えるまでメール交換役員会としている帯江研は6月25~26日実施し、当面活動の軸足を参加型から、“紙”による情報発信に尽力することになった。「帯江研」だよりは従来通り季刊とし、臨時号も随時発行。外部有識者の寄稿原稿を積極的に掲載していく。年度末には帯江研刊行の冊子づくりを目指す。

◆シンポ講演

帯江研役員・坂本昇氏は8月19日、山陽放送主催シンポ「明治の偉人伝」の一人に坂本金弥が取り上げられたことから講演依頼があり、「帯江は後半生の出発点」をテーマに話す予定。

